

# 接続詞「ときに」から「ところで」への交替

—— 文法的变化が引き起こした語彙交代 ——

姜 小晶・安部清哉

## 1. 目的

明治に入り近世語から新たな近代語へと、日本語はさまざまな面でその姿を変えてきた。接続詞の中にもそのような近代語確立期の変化を蒙ったものがいくつか見られる。本稿に取り上げる「ときに」と「ところで」も、そのようなものの1つである。

この2語は、先行研究を見ても、近現代における話題転換の接続詞として類義語関係にあることは確認されてきている。しかし、日本語史、特に語彙史的視点から捉え、それらが新旧の交代関係をなしたものであったことは特に注目されてこなかった。本稿では、この2語の接続詞としての用法に着目し、大正期において「ときに」から「ところで」への語彙史的交替を成した実態を、まずは用例をもって明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究①

### (1) 話題転換の類義接続詞「ときに」「ところで」「さて」

近代現代におけるこの二語は、以下に見る山口堯二氏、森田良行氏も取り上げているように、その接続詞の用法においては類義語として認識されてきたものである。しかし、明治以降昭和までは——「ときに」の方がやや古語的傾向を帯びていたことはあるものの——ほぼ一環して共存してきたこともあり、近代前期におけるその交替はほとんど注目されてこなかった。そのため、2語に言及する研究でも、そのような観点での言及は今回の調査の範囲では見られなかった。また、同様に、最新の成果を反映していると思われる近年の『日本国語大辞典 第2版』の当該項目においても、特にその点での「語史・語誌」的な言及は加えられていない。それは2語に関する研究の現状を示しているものと見ることができよう。

本稿では、2語の接続詞としての確立時期について、『日本国語大辞典第2版』で簡単に確認し、ついで、先行研究での言及を確認しながら、この2語の接続詞としての交替史を検討していくことにする。関連して類義語の「さて」【補注】にも言及するとこ

ろがある。

## (2) 『日本国語大辞典 第二版』小学館

『日本国語大辞典 第2版』（以下、日国と略す）の「ときに」には、1 連語、2 副詞、3 接続詞の用法が挙げられ、この順での用法の変遷がわかる。ここでは問題とする接続詞の説明と初出例の時期を確認しておきたい。（下線引用者、以下同じ）

- 〔接続詞〕 それまで述べてきた事柄から離れて別の新しいことを言い出すときに用いる語。また、特に注意を引きつけるための話の冒頭で用いる。ところで。さて。  
・米沢本沙石集（1283）九・九「時に売候べし、いくいくらは買はせ給べし」  
・浮世草子・西鶴織留（1694）三・二「時に連歌の塚をゆるかせにして俳諧といふもこれ歌道の一脉なり」  
・滑稽本・浮世床（1813-23）初・中「トキニとまだまアこちらの方へ廻ってくるはやっと間（ひま）が入るな」  
・草枕（1906）〈夏目漱石〉四「ときに何時だなど時計を見ると、もう十一時過ぎである」

類義語として「ところで」「さて」が挙がっており、3語が類義関係にあることがわかる。中世から用例が見られるが、『沙石集』と近世の例とが隔たっており、その点、米沢本の書写年代や資料の性格の問題は検討を要すると思われる。近世以降の用例は連続しており、少なくとも近世以降には、話題転換の接続詞として使用されてきたことがわかる。用例の最後が明治末の漱石作品であることにも注意しておきたい。

一方、「ところで」を見ると、1 接続助詞、2 接続詞があり、2 接続詞の説明と用例は次のとおりである。

### ○【二】〔接続詞〕

- ①先行の事柄に反する事柄を述べるときに用いる。だが。しかるに。（例、略）
- ②先行の事柄から順当に予想される事柄を述べるときに用いる。そうすると。すると。それで。（例、略）
- ③それまで述べてきた事柄から離れて、話題をかえるときに用いる。さて。それはそれとして。  
・安愚楽鍋（1871-72）〈仮名垣魯文〉二・下「りかうにすぎて姦曲（わるちゑ）をめぐらすものがでるぢやから、そのままにはすておかれぬテ。ところで古金から四文一文の銅銭までその比例（わりあひ）が出来たのぢや」  
・当世書生氣質（1885-86）〈坪内逍遙〉二「遅刻の証書をもらふて、帰（もど）った所がなア、存外に早う帰（もど）ったじゃ。所で届をくださいですんだによって、其証書を其儘にして、取置（とっと）いたのが」

話題転換の用例は、『安愚楽鍋』からである。「語誌」には次のようにある。

「(2) 【二】のように接続詞として使われるようになるのも、室町時代から江戸初

期にかけてであり、用法としては、(1) (2)に見られるようにやはり順接・逆接両様が存在した。近代以降は、話題をかえる (3) の用法が主流となっている。」

類義語としてやはり共通する「さて」が挙げられ、また、話題転換の③の用法は、およそながら近代に入ってからとみなせることがわかる。これ以降「ところで」は現在まで続いており、一方「ときに」は現代語では文語化して口語ではほぼ消滅した。先の「ときに」の記述と考えあわせると、「ときに」は漱石前後以降いずれかの段階で衰退へと向かい、明治以降と見られるどこかの段階で「ところで」と交替したと推定できる。では、その交替の実態はどのようであったろうか。交替の実態を報告する前に、以下に先行研究での言及を簡略ながら確認しておきたい。

(3) 山口堯二「特集・接続詞のすべて 接続詞小辞典 口語編〈ときに〉〈ところで〉」  
『月刊文法』2-12 昭45・10)

山口(1970)には次のように、特に「ところで」の用法の変化時期と要因に関して言及がある。

- 「ときに」【意味】話題の転換を示す。話しことばにだけ用いられ、多くは、とりとめのない会話の中で、ふと思い出したことがらを話題としてもち出すような場合に用いられる。

【語誌】名詞「とき」に格助詞「に」がついて接続詞化したもので、この語形が話題の転換を示すのに用いられはじめたのは、江戸時代後期の江戸語からのことらしい。(「ア、い、さけだ。時にさかなは、ハ、アかまぼこも白板だ。」、『東海道中膝栗毛』初編)(中略)話題の転換を示す現代語の接続詞「ところで」「さて」「では」など、いずれも先行することがらに対してより直接的な内容上の関係を示す順接などの用法から転じたものであった。(下略)」

- 「ところで」【意味】話題の転換を示す。これまでの話題を変えて別の話題をもち出すときに用いられるもので、話しことばにも書きことばにも広く使用される。語誌として、これは、形式名詞「ところ」と格助詞「で」が一語化して接続助詞となり、さらに転じて接続詞としても用いられるに至ったものである。この語形が接続助詞および接続詞として用いられはじめたのは、室町時代のことであるが、そのころの「ところで」は、現代語のそれとは意味が異なり、条件に対する理由などの接続確定条件を表わすものであった。

ある川端に狼も羊も水を飲むに、狼は川上に居、羊の子は川裾に居ところで、かの狼この羊をくらわばやと思ひ、……(天草本伊曾保物語)

接続詞「ところで」が話題の転換を示すようになるのは、江戸時代の後期からであり、こうした用法の変化は、接続助詞としての「ところで」が同じところから逆接仮定的な条件を表わすようになるという変化に応じたものであろう。現代語で

は、接続助詞「ところで」は、

雨が降ったところで、困りはしない。

というふうに、仮定の意味あいに用いられるのであるが、一方、話題の転換を示す接続詞としての「ところで」にも、「それはそれとして（それはそれとする）」ということばに置換できるような、先行する話題に対する仮定的把握の意味あいを認めることができる。つまり、現代語においても、接続助詞「ところで」と話題の転換を示す接続詞「ところで」との間には、かすかながら意味上の関連が認められるのである。

上記の下線部に、A「ときに」および「ところで」の話題転換用法の誕生が江戸時代後期とあるが、先に『日本国語大辞典』（第2版）で確認したように、「ときに」は江戸前期（『西鶴織』1694）、「ところで」は明治初期（『安愚楽鍋』）と見られるので、現段階では時代的には各々の再確認が必要と思われる（後述）。

一方、接続詞「ところで」の誕生において、接続助詞としての「ところで」が、江戸時代後期から（これは後掲の飛田良文（1970）でも指摘されている）逆接仮定条件表現に変化したことが影響したと推定されている部分は注目される。なぜなら、後半の下線部に例示されているように、それら接続助詞と話題転換の接続詞の用法には、確かに共通性が認められるからである。その点で、本稿執筆者も、接続助詞の方の意味用法の変化が接続詞「ところで」の誕生の1要因となったという点は支持できると考える。

ただし、森田氏は、接続助詞としての「ところで」の意味変化の時期である江戸後期と、一方の接続詞「ところで」の誕生時期（江戸後期）とが一致していることを理由に、それらの変化を直接的かつ一直線的に直結させておられる。後に示すように、その変化は、どうも単純な直接的なものではなかったようである。

いま簡略に指摘しておけば、逆接仮定の条件表現の接続助詞「ところで」の台頭（誕生にあらずその後の一般化と隆盛）は新表現としての単独の単純な出現というかたちで起こった現象ではなく、同じ逆接仮定の条件表現の「ところが」との交渉の中での短期間の新旧交代というかたちをとっており、「近代（明治後半から大正）」に起こっている現象と把握されているものである（後掲の鶴岡（1972））。その交代時期をまずは把握する必要がある。さらに興味深いことに、一方の接続詞としての「ところで」の台頭も、本稿ではじめて指摘するように、同じ用法の接続詞「ときに」との新旧交代として大正後半に（接続助詞「ところが」から「ところで」への交代の後で）起こっている。つまり、「接続助詞「ところで」誕生→接続詞「ところで」への拡大」という単純な構造なのではなく、明治から大正にかけての「接続助詞の新旧交代→接続詞の新旧交代」という構造的変換として把握するべき現象であることが見えてくるのである。本稿ではその点にも焦点を当てて明らかにしていきたい。

#### (4) 森田良行『基礎日本語辞典』角川書店 平成元年

森田氏は『基礎日本語辞典』の「さて」において①感動詞、②接続詞の用法を説明し、②の中で「ときに」「ところで」を関連語として解説されている。

- 【**ときに**】——「ところで」とほとんど同じ意で、会話中に用いる。会話の途中で、それまでの話題とは全く関係のない事柄を思いつき、話題をそのほうへと変えるときに用いる。
- 【**ところで**】——「さて」と同様、話題の転換、新しい話題を持ち出すときに使うが、「さて」は文章の流れに間を入れて話し手・聞き手の心に区切りをつけ、次の文へと新しい気持ちで立ち向かう意識がある。しかも、全体の文章の流れは続いていて、ただ段落が変わるという文派の切れ目を表す。「さて」の前の部分と後の部分とは無関係ではなく、隣りあう段落として話の大筋は続いているのである。一方「ところで」は、前の文（もしくは文の連続）の話題とはまったく関係のない事柄に突然移るときに用いる接続詞である。文章の流れは完全に切れて、別の方向へと転換している。視点の方向転換である。したがって「ところで」は「さて」に換えられない例が多い。精神分裂症的な文派の脱線である。（下略）

森田（1989）では「ときに」は昭和後半においてもまだ使用されているという扱いであったが、使用年齢層には既に偏りがあったように思われる。

これらの指摘からも、接続詞だけでなく、接続助詞の「ところで」「ところが」も検討しておく必要があることがわかる。次の章では、接続助詞の方の先行研究を確認しておくことにしたい。

### 3. 先行研究②——接続助詞「ところが」「ところで」交代の一要因

- (1) 飛田良行「特集・日本語における助詞の機能と解釈 接続助詞ば・と・とも・ど・ども・も〈ても〉〈けれども〉〈ところが〉〈ところで〉」（『国文学解釈と鑑賞』35-13 昭45・11）

飛田良行の論文では、次のように接続助詞としての「ところで」が説明されている。

- 「ところで」は形式名詞「ところ」に格助詞「で」のついたもの。助動詞「た」で終わる文について順接と逆接の条件をあらわす。「ところで」は室町時代からみえ、「いとどその様は見苦しうなつたところで、国王この姿を御覧なされて」（天草本伊曾保物語）のように、理由を示し、「……ので、……と、……時」などの意を示す。ロドリゲスの日本大文典にも「トコロデはホドニと同じく理由を示す」とあり、順接の条件をあらわす。江戸後期の江戸語では、「とどのつまりへ往つた所で、痛い

腹を切らされてはつまらない咄しさノ」(いろは文庫)のように「……ても」の意で逆接の条件を示す。明治以後は、明治中頃からさかんに用いられ、大正以後は逆接の「ところが」を圧倒した。

(2) 靄岡昭夫「<ところが>と<ところで>の通時的考察—その逆接仮定条件表現用法の成立をめぐる」(『国語学』88 昭47・3)

1938	1887	1835	1813	年代
悪魔 最初の敵は	白菊 鹿鳴館 黝い紫陽花	浮雲 金色夜叉 坊っちゃん	梅曆 花街鶯 廓鶯 丑日持	淨世風呂 淨世床
	人問万歳 僕の帽子 初年兵 杜子春 腕くらべ	牡丹燈籠 鳥追阿松 安愚楽鍋 弁天小僧 切られ与三 夢酔 春色辰巳園		逆接仮定条件表現 「ところが」による
				逆接仮定条件表現 「ところで」による

上の表のように接続助詞としての「ところで」は江戸時代よりも近代にきて、さかんに用いられたことが示されている。

靄岡昭夫(1972)は、接続助詞の「ところが」から「ところで」への明治から昭和における交代とその要因を考察していて興味深い。靄岡氏は、上記の飛田(1970)はまだ引用されていないが、上掲の変遷図を示しつつ、次のようにまとめている。接続助詞では、1880年代以降に「ところが」から「ところで」への交代があったことがわかる。

- 【引用注：接続助詞】「ところで」は【中略】一八八〇年代にはかなり一般的に逆接仮定条件表現に用いられるようになっており、同時に「たとい」「よしんば」などの語と呼応する用法も認められるようになっている。
- 【接続助詞として】「ところで」は「ところが」が作った逆接仮定条件表現の用法の基盤の上に立って、「ところが」に代わるものとしてできたもの<sup>1)</sup>と考えることができると思う。
- 2・同じ時期に逆接仮定条件表現に用いられた「ところが」と「ところで」との相違 一八八〇年から一九二〇年代にかけて作られた文献の中には、逆接仮定条件を

表わすのに「ところが」と「ところで」とが合わせ用いられているものがある。【略】  
「ところが」の用いられることもあるが、その場合、条件句に「が」格の主語をもつものはない。

○現代語で「が」格の主語を用いることが多くなったこと、そのとき一つの句の中では【引用注：接続助詞「ところが」との】「が」の重複をさけるような工夫をほどこす傾向のあることが、逆接仮定条件表現における【接続助詞の】「ところで」の成立・頻用と、「ところが」の衰退の一因であると考えられるのではないだろうか。そこでは概略、次のような変遷が指摘されている。

○逆説接続助詞「ところが」⇒その形態を基盤として遅れて逆説接続助詞「ところで」成立⇒近代での「が」格使用の増加⇒その「が」との同音音声重複回避による接続助詞「ところが」の使用忌避⇒その代替として、併行使用されていた接続助詞「ところで」の1880年代以降の台頭と1910年前後での単独使用状態確立

主格「が」の表示増加のため、それが接続助詞「ところが」の「が」との同音音声衝突回避を誘発して、接続助詞「ところが」使用が忌避された結果、接続助詞「ところで」の台頭と優勢化となったと解釈されている。そこに発生しているのは、文法上の、主格「が」と関わる近代化、音声上の同音衝突的現象、文法機能上の連語形態である接続助詞における交代現象である。

#### 4. 「ときに」「ところで」の調査

先行研究から確認されるところでは接続詞としての「ときに」は江戸から用いられ、近代以後はそれに代わって次第に「ところで」が用いられるようになったとみられる。そこで「ときに」から「ところで」への交替時期と予想される明治以降を中心に主要な作家と作品を調査した。作家別用例数(表1)と作品年代別用例数(表2)とを見ていく。

##### (1) 作家生年代順用例数

作家の生年の相違による用例の変化を見るべく作成したのが表1である。江戸時代から用例があるが、「ときに」から「ところで」への用例数の交代は志賀直哉・葉山嘉樹・太宰治あたりのおよそ1880年生まれ以降に認めることができる。

〈表1 作家生年順用例数〉

	作家	生年	調査 作品数	用例のあった 作品数	接続詞		参考 さて
					ときに	ところで	
1	仮名草子	—	1 <sup>注1</sup>	0	—	—	6
2	井原西鶴	1642～1693	3 <sup>注2</sup>	0	—	—	97

3	近松門左衛門	1653～1724	12 <sup>注3</sup>	3	4	0	93
4	仮名垣魯文	1829～1894	1 <sup>注4</sup>	1	2	2	(副) 3
5	森鷗外	1862～1922	15 <sup>注5</sup>	1	—	1	76
6	二葉亭四迷	1864～1909	2 <sup>注6</sup>	1	1	—	
7	尾崎紅葉	1867～1903	1 <sup>注7</sup>	1	5	1	
8	夏目漱石	1867～1916	13 <sup>注8</sup>	10	51	3	34
9	幸田露伴	1867～1947	2 <sup>注9</sup>	1	1	1	
10	樋口一葉	1872～1896	3 <sup>注10</sup>	0	—	—	
11	島崎藤村	1872～1943	1 <sup>注11</sup>	1	3	—	
12	<b>志賀直哉</b>	1883～1971	18 <sup>注12</sup>	5	2	5	10
13	芥川竜之介	1892～1927	24 <sup>注13</sup>	2	3	—	6
14	<b>葉山嘉樹</b>	1894～1945	3 <sup>注14</sup>	2	—	2	
15	堀辰雄	1904～1953	3 <sup>注15</sup>	0	—	—	
16	原民喜	1905～1951	3 <sup>注16</sup>	0	—	—	
17	<b>太宰治</b>	1909～1948	23 <sup>注17</sup>	4	—	5	23

なお、井原西鶴<sup>注18</sup>、近松門左衛門<sup>注19</sup>、森鷗外<sup>注20</sup>、夏目漱石<sup>注21</sup>、志賀直哉<sup>注22</sup>、芥川竜之介<sup>注23</sup>、太宰治<sup>注24</sup>と『身の鏡』<sup>注25</sup>、『安愚楽鍋』<sup>注26</sup>、二葉亭四迷の『あひゝき』<sup>注27</sup>、樋口一葉の『たけくらべ』<sup>注28</sup>は索引を参考に本文に当たり、それ以外の、二葉亭四迷の『平凡』、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉の『にごりえ、大つごもり』、島崎藤村、葉山嘉樹、堀辰雄、原民喜は、青空文庫<sup>注29</sup>を利用して調査した。

## (2) 作家生年順での作品年代順用例数表

表1での変化時期をより細かく確認するために、作品年代順（作家別の見やすさを考え作家生年別）に示したのが表2である。「ところで」の用例が上回る作品が明治44、45年に現れ（『妄想』『大津順吉』で「ところで」が1例であるが単独使用）、使用にゆれが見られる志賀直哉が大正10年『暗夜行路』で「ところで」を優勢に使用（1対2）以降は（芥川の保守的使用はあるものの）、大正末年の葉山嘉樹の使用以降「ところで」にはほぼ移行していったようすが見て取れる。交代の完了時期はおよそ大正後半ころと推定される。

その交代時期は、より細かな時代変遷がわかる作品年代別用例数を示した表3でも確認できる。「ところで」は、明治44（1911）年頃から優勢になる兆しを見せ始め、大正10（1920）年頃には、「ところが」が完全に衰退して、「ところで」の単独使用がほぼ確立していく様子が明らかとなっている。



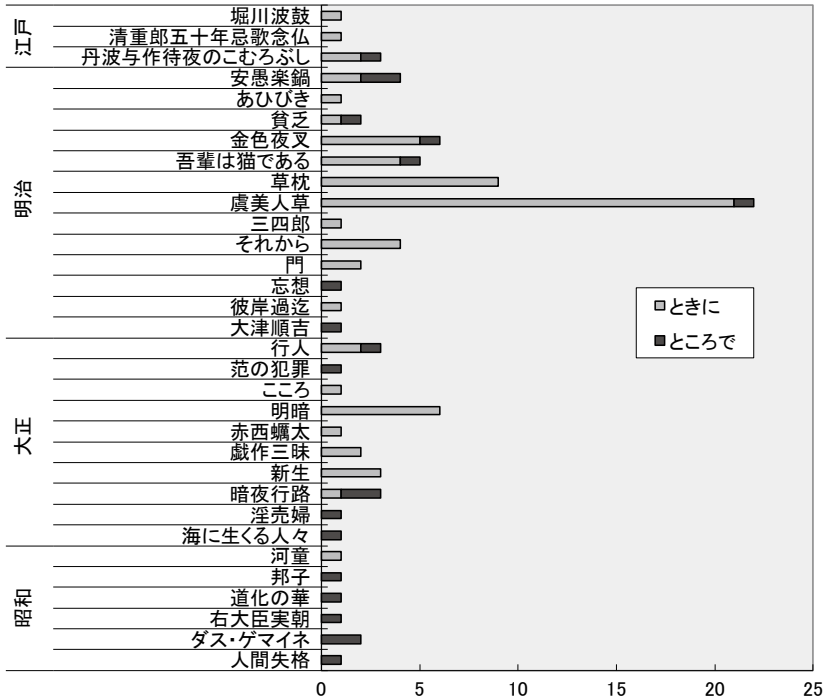
〈表 2 作家生年順での作品年代順用例数表〉

作家	時代	作品	ときに	ところで	
近松門左衛門	江戸	堀川波鼓	1	—	
		清重郎五十年忌歌念仏	1	—	
		丹波与作待夜のこむろぶし	2	1	
仮名垣魯文	明治 4	安愚楽鍋	2	2	
森鷗外	明治 44	忘想	—	1	
二葉亭四迷	明治 21	あひびき	1	—	
尾崎紅葉	明治 30 ~ 35	金色夜叉	5	1	
夏目漱石	明治 38 ~ 39	吾輩は猫である	4	1	
	明治 39	草枕	9	—	
	明治 40	虞美人草	21	1	
	明治 41	三四郎	1	—	
	明治 42	それから	4	—	
	明治 43	門	2	—	
	明治 45	彼岸過迄	1	—	
	大正 1 ~ 2	行人	2	1	
	大正 3	こころ	1	—	
大正 5	明暗	6	—		
幸田露伴	明治 30	貧乏	1	1	
島崎藤村	大正 7	新生	3	—	
志賀直哉	明治 45	大津順吉	—	1	
	大正 2	范の犯罪	—	1	
	大正 6	赤西蠣太	1	—	
	大正 10	暗夜行路	1	2	
	昭和 2	邦子	—	1	
芥川竜之介	大正 6	戯作三昧	2	—	
	昭和 2	河童	1	—	
葉山嘉樹	大正 14	淫売婦	—	1	
	大正 15	海に生くる人々	—	1	
太宰治	昭和 10	道化の華	—	1	
	昭和 18	右大臣実朝	—	1	
	昭和 18 ~ 23	ダス・ゲマイネ	—	2	
	昭和 23	人間失格	—	1	

〈表3 作品年代別用例数〉

		作品	ときに	ところで
江戸	江戸	堀川波鼓	1	—
		清重郎五十年忌歌念仏	1	—
		丹波与作待夜のこむろぶし	2	—
			4	0
明治	明治 4	安愚楽鍋	2	2
	明治 21	あひびき	1	—
	明治 30	貧乏	1	1
	明治 30～31	金色夜叉	5	1
	明治 38	吾輩は猫である	4	1
	明治 39	草枕	9	—
	明治 40	虞美人草	21	1
	明治 41	三四郎	1	—
	明治 42	それから	4	—
	明治 43	門	2	—
	明治 44	妄想	—	1
	明治 45	彼岸過迄	1	—
明治 45	大津順吉	—	1	
			51	8
大正	大正 1～2	行人	2	1
	大正 2	范の犯罪	—	1
	大正 3	こころ	1	—
	大正 5	明暗	6	—
	大正 6	赤西蠣太	1	—
	大正 6	戯作三昧	2	—
	大正 7	新生	3	—
	大正 10	暗夜行路	1	2
	大正 14	淫売婦	—	1
	大正 15	海に生くる人々	—	1
			16	6
昭和	昭和 2	河童	1	—
	昭和 2	邦子	—	1
	昭和 10	道化の華	—	1
	昭和 18	右大臣実朝	—	1
	昭和 18～23	ダス・ゲマイネ	—	2
	昭和 23	人間失格	—	1
			1	6

〈グラフ I 作品年代別用例数 (表3のグラフ化)〉



(3) 主要用例一覧

以下に2語の用例を、主要作家作品と、特に交代時期の大正期の用例を中心に時代ごとにかけて、一部掲載しておく(「ときに」は\_\_\_\_、「ところで」は\_\_\_\_を付した。)

〈江戸時代〉

- 『堀川波鼓』：**時に**門外さはがしく口論有か先しばしと、(五三六)
- 『丹波与作待夜のこむろぶし』
  - ・**時**におく口ざゝめいてはや御たちと姫君の、(三五〇)
  - ・**時に**人あし四五十人ひそめいて来りしが、(一〇八一)
  - ・はへぬきのねん者じや**ところで**名はしねんじよの三吉、(一二一)

〈明治時代〉

- 『あひびき』：「小語だ。**時に**出立は明日になツだ…」
- 『貧乏』
  - ・「ハハハ、これではお互《たがい》に浮ばれない。**時に**明日《あす》の晩からは柳原《やなぎはら》の例のところ○州屋《まるしゅうや》の乾分《こぼん》の、～」

・「～、野郎と来ちゃあ政府《おかみ》へでも売りつけるより仕様がねえ、ところでおれ様と来ちゃあ政府《おかみ》でも買い切れめえじゃあねえか。」

○『金色夜叉』

・「浴《ゆ》に一つ行かうよ。手拭《てぬぐひ》を貸してくれ給へな」遊「ま、待ち給へ、今一処に行くから。時に弱つて了つた」(「さて」<sup>註</sup>の意味とみられる。)

・「それは少し白馬は馬に非《あら》ずだつたよ」「時に、もう下へ行つて見て遣り給へ」

・～然し朋友の側から遊佐君を見ると、飛んだ災難に罹《かか》つたので、如何《いか》にも気の毒な次第。ところで、図《はか》らずも貸主が君と云ふので、轍鮒《てつぷ》の水を得たる想《おもひ》で我々が中へ入つたのは、営業者の鰐淵として話を為るのではなくて、～

○『吾輩は猫である』

・「まるで犬に芸を仕込む気で居るから残酷だ。時に寒月はもう来そうなものだな」

・～と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。

○『虞美人草』

・甲野さんはここに至って始めて笑った。「時に甲野さん、今日は報告かたがた少々談判に来たんだがね」

・「宜《よ》ろしい」「ところで、みんな打ち明けてしまいますが。——実は今日大森へ行く約束があるんです」

○『忘想』：～を承認している。ところであらゆる金昔迷を打ち破って置いて、生を肯定しろと云うのは無理だと云うのである。

○『大津順吉』：～、私にはそれが時々来る事である。所で、私の父は私に就てこう思っている。

〈大正時代〉

○『行人』

・すると三沢は突然自分に向って、「時に君の兄さんだがね」と言い出した。自分はこちらでもまた兄さんかと驚いた。

・「そう云う種類の患者もあるでしょう」「ところでさ、もしその女がはたしてそういう種類の精神病患者だとすると、

○『范の犯罪』：～と云った。「所でお前には妻の死を悲しむ心は少しもないか？」

○『暗夜行路』

・「えらい損害だね」「時に、今日は肴は何だい」

・～、俺は非常に羨しかった。所で、俺にはその焦点がないのだ。～」

・～親日主義者なのだといっていた。所で、いよいよ鉄道敷地の買上げが始まって見ると、～

- 『淫売婦』・私はブラブラ歩いて行った。ところで、此時私が、自分と云うものをハッキリ意識していたらば、ワザワザ私は道化《どうけ》役者になりやしない。
- 『海に生くる人々』「何にしても時が、悪いもんですからなあ。ところで、ストキが、海事局にボーイ長の雇い入れ未済のことと、  
(昭和時代)
- 『河童』:「ふん、君はこの国でも市民になる資格を持っている。……時に君は社会主義者かね？」
- 『邦子』:～、話は簡単に済んだ。所で、こういう事を書くのは憚られる事であり、  
～
- 『道化の華』:それは保証する。ところで、君、そんなふうの小説を書いてみないか。
- 『右大臣実朝』:～源家は昔から親子兄弟の仲が悪いんだ。ところで将軍家は、このごろ本当に気が違っているのだそうじゃないか。～」
- 『ダス・ゲマイネ』
  - ・手紙だけは巧い男という怪談がこの世の中にある。ところで僕は、手紙上手であるか。～
  - ・～気ちがいみたいに笑った。ところで君は、誰をいちばん好きなんだ。
- 『人間失格』・私は、リュックサックを背負って友人の許《もと》を辞し、れいの喫茶店に立ち寄り、「きのうは、どうも。ところで、……」とすぐに切り出し、～

## 5. まとめ

本稿では、場面転換の意味の接続詞「ときに」「ところで」の近代における交代現象を追って、先行研究や辞書記述を確認した。それに併せて、その交代現象に実は陰で影響を及ぼしていた接続助詞の「ところで」「ところが」の先行研究を確認し、そこでの交代現象が起こった時期と要因とを改めて確認して、接続詞での交代時期とも照合してみた。その結果、接続助詞における交代時期（1880年前後から1910年前後での完了）と、接続詞における交代時期（1910年前後から始まり1920年前後での完了）には、10～20年間ほどの前後関係と密接な連動性があったことが明らかとなった。

接続詞「ときに」は江戸時代から用いられたとみられる。接続詞の「ところで」は江戸時代の後期から用いられたが、明治以後からさかんに用いられ、大正以後は「ときに」のかわりに「ところで」が用いられていることが確認できた。また接続詞「ときに」を改めて検討してみると、辞典、論文、用例の多くが会話中に用いられていることが分かる。「ときに」「ところで」はまず話ことばでの交代という面もあることも分かる。

接続助詞「ところで」を取り上げた飛田（1970）や鶴岡（1972）、また、接続詞に関する先行研究の指摘、および、本稿での接続詞「ときに」「ところで」の調査（4章）

をつなぎ合わせていくと、次のような玉突き現象のような変遷があったことを、はじめ  
て読み解くことができた。

○近代での「が」格使用の増加⇒その「が」との音声重複回避による接続助詞「ところが」の使用忌避⇒その代替に接続助詞「ところで」の台頭⇒接続助詞「～ところで」の語形定着が接続詞「ところで、」の浸透を後押し⇒接続詞「ときに」（口語）に代わって接続詞「ところで」（書き言葉・話し言葉）が口語も含め広く浸透

即ち、一見、接続詞上のみで起こっていたかのように見えた語彙的交代現象（「ときに」から「ところで」へ）や、一見、接続助詞「ところで」の台頭が直接的に接続詞「ところで」の確立と優勢へと直結したかに見える現象は、より複眼的に調査考察していくと、文法現象の近代的变化（主格の「が」表示の増加）、それとの同音音声衝突回避現象という音声上の現象、その同音衝突忌避による接続助詞での語形交代現象が、「ときに」から接続詞「ところで」への話ことば・書き言葉両位相におよぶ交代を引き起こす要因となっていた、ということが明らかになったのではないか、と思われる。

**【資料注——用例の確認できなかった資料は次の通り。仮名草子『身の鏡』、近松門左衛門『心中宵庚申』、井原西鶴『好色一代男』『西鶴諸国はなし』『好色五人女』、二葉亭四迷『平凡』、幸田露伴『風流仏』、樋口一葉『たけくらべ』『にごりえ』『大つごもり』、葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』、堀辰雄『風立ちぬ』『姨捨』『曠野』、原民喜『夏の花』『廃墟から』『原爆小景』。】**

## 【注】

- 1 身の鏡
- 2 好色一代男、西鶴諸国はなし、好色五人女
- 3 会根崎心中、堀川波鼓、五十年忌歌念仏、丹波与作待夜のこむろぶし、冥途の飛脚、夕霧阿波鳴渡、大経師昔暦、鍵の権三重帷子、博多少女郎波枕、心中天の網島、女殺油地獄、心中宵庚申
- 4 安愚楽鍋
- 5 かのよう、阿部一族、半日、安井夫人、キタ・セクスアリス、山椒大夫、最後の一句、普請中、高瀬舟、妄想、洪江抽斎、雁、青年、文づかひ、舞姫
- 6 あひびき、平凡
- 7 金色夜叉
- 8 倫敦塔、吾輩は猫である、薙露行、坊っちゃん、虞美人草、それから、彼岸過迄、行人、こころ、明暗、草枕、門、三四郎
- 9 風流仏、貧乏
- 10 たけくらべ、にごりえ、大つごもり

- 11 新生
- 12 網走まで、和解、濁った頭、或る朝、母の死と新しい母、十一月三日午後の事、大津順吉、小僧の神様、正義派、真鶴、青兵衛と瓢箪、山科の記憶、范の犯罪、邦子、城の崎にて、灰色の月、赤西蠣太、暗夜行路
- 13 羅生門、杜子春、鼻、藪の中、芋粥、トロッコ、手巾、雛、戯作三昧、蜘蛛の糸、地獄変、枯野抄、蜜柑、舞踏会、秋、奉教人の死、大導寺信輔の半生、点鬼簿、玄鶴山房、河童、蟹気楼、或阿呆の一生、齒車、海のほとり
- 14 淫売婦、海に生くる人々、セメント樽の中の手紙
- 15 風立ちぬ、嫉捨、曠野
- 16 夏の花、廃墟から、原爆小景
- 17 葉、魚服記、地球図、雀こ、猿面冠者、彼は昔の彼ならず、玩具、めくら草紙、富嶽百景、ヴィヨンの妻、右大臣実朝、人間失格、思い出、列車、猿ヶ島、道化の華、逆行、ロマネスク、陰火、ダス・ゲマイネ、走れメロス、桜桃、斜陽
- 18 近世文学総索引編纂委員会編『近世文学総索引 井原西鶴 別巻』教育社 1988年
- 19 近世文学総索引編纂委員会編『近世文学総索引 近松門左衛門 別巻』教育社 1986年
- 20 近代作家用語研究会教育技術研究所編『作家用語索引 森鷗外 別巻』教育社 1985年
- 21 同上『作家用語索引 夏目漱石 第Ⅱ期 別巻』教育社 1986年
- 22 同上『作家用語索引 志賀直哉 別巻』教育社 1987年
- 23 同上『作家用語索引 芥川竜之介 別巻』教育社 1985年
- 24 同上『作家用語索引 太宰治 別巻』教育社 1989年
- 25 宮田裕行編『仮名草子『身の鏡』総索引』新典社 昭和61
- 26 国立国語研究所著『国立国語研究所資料集 牛店雑談 安愚楽鍋用語索引』秀英出版 昭和50
- 27 太田絃子編『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と文体・索引』和泉書院 1997年
- 28 鶴岡昭夫編『たけくらべ総索引』笠間書院 平成4年
- 29 <http://www.aozora.gr.jp>

【補注】「ときに」「ところで」の関連語として「さて」も同じ意味の語である。森田良行の『基礎日本語辞典』には、接続詞として「①それまでの事柄にいちおうけりを付けて、新たな行動へと移る転換部に用いる。②それまでの話が一段落して、次の話題へと移る場合や、それまでの話題の中から特定のものを取り上げて、それについて新たに話を始めるときに用いる。」の用法がある。

## 【参考文献】

- 『日本国語大辞典 第二版』小学館 2001年
- 森田良行『基礎日本語辞典』角川書店 平成6
- 近世文学総索引編纂委員会編『近世文学総索引 井原西鶴 別巻』教育社 1988年
- 近世文学総索引編纂委員会編『近世文学総索引 近松門左衛門 別巻』教育社 1986年
- 近代作家用語研究会教育技術研究所編『作家用語索引 森鷗外 別巻』教育社 1985年
- 同上『作家用語索引 夏目漱石 第二期 別巻』教育社 1986年
- 同上『作家用語索引 志賀直哉 別巻』教育社 1987年
- 同上『作家用語索引 芥川竜之介 別巻』教育社 1985年
- 同上『作家用語索引 太宰治 別巻』教育社 1989年
- 宮田裕行編『仮名草子 『身の鏡』総索引』新典社 昭和61
- 国立国語研究所著『国立国語研究所資料集 牛店雑談 安愚楽鍋用語索引』秀英出版 昭和50
- 太田絃子編『二葉亭四迷『あひゞき』の表記研究と文体・索引』和泉書院 1997年
- 鶴岡昭夫編『たけくらべ総索引』笠間書院 平成4年 <http://www.aozora.gr.jp>
- 山口堯二「特集・接続詞のすべて 接続詞小事典 口語編〈ときに〉〈ところで〉」『月刊文法』2-12 昭45・10
- 飛田良行「特集・日本語における助詞の機能と解釈 接続助詞ば・と・とも・ど・ども・も〈ても〉〈けれども〉〈ところが〉〈ところで〉」『国文学解釈と鑑賞』35-13 昭45・11
- 鶴岡昭夫「〈ところが〉と〈ところで〉の通時的考察—その逆接仮定条件表現用法の成立をめぐる—」『国語学』88 昭47・3
- 沖 裕子「接続詞と接続助詞の「ところで」——「転換」と「逆接」の関係性——」『日本語教育』98号（日本語教育学会）1998-10 pp. 37-48
- 甲田直美「転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐる」『日本語と日本文学』21号（筑波大学）1995-6 pp. 31-42
- 梅林博人「会話の「ところで」と文章の「ところで」」『都大論究』31号 1994-6 pp. 13-22

【付記】 本稿は、姜小晶（元・韓国・新羅大学非常勤講師）が調査した近代現代接続詞の歴史的研究の中から、表題の2語について両名にて検討の上まとめたものである。